

太宰治著述一覽稿・補訂

——自大正十二年至昭和五年——

山内祥史

## Summary

### A Bird's-Eye View of the Works Composed by Osamu Dazai 1923~1930

Shōshi Yamanouchi

The collection titled "The Complete Works of Osamu Dazai" comprises all that Osamu Dazai (1909 ~1948) ever wrote and in addition his statements at the meeting of joint criticism of contemporary literary works and round table talks, particularly those set in print.

At the same time, efforts were made to include descriptions of those contemporary magazines which either printed the late writer's works in full, or introduced them in part previewing the "Complete Works of Osamu Dazai." This allows this edition to be used as an aid for those desiring to make reference to the said "Complete works" in relation to certain paragraphs or passages in the original writings still in the form of manuscripts.

Space is also given to critics of Dazai's writing, limited strictly to such portions as directly dealt with the late writer's works.

In the "Additional Note," allusion is made to works of Dazai published so far only as fragments and to those which failed to be printed in "The Complete Works". It also includes "notes" and "remarks" related to the works as well as to their first publication, and other remarks insofar as they relate to the literature of Dazai.

新年・予習用読方帖・大正十二年一月十五日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 傍島正守は、「予習用読方帖」につきのように記している。

1. 新年の綴り方は、もつと雑誌的でなく書きなさい。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

十五日

綴り方課題

(1) 本を借りる手紙

(2) 新年

以上、但、(1)は口語体にも候文にてもよし。

(2)は普通文。

本を借りる手紙・予習用読方帖・大正十二年一月十五日記・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 傍島正守は、「予習用読方帖」につきのように記している。

(2) 本を借りる手紙は、大体よいが、あまりかんたん過ぎました。

〔付記〕「新年」の項を参照のこと。

吹雪の朝・予習用読方帖・大正十二年一月十八日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 傍島正守は、「予習用読方帖」に、「吹雪の朝」と「入営兵を送る感ず」とを評して、つぎのように記している。

綴り方は、みなよく出来た。尚深く／＼考へた所をかくと、もつと／＼名文になる。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

十八日

綴り方課題

(1) 吹雪の朝

(2) 入営兵を送る感じ

以上。

入営兵を送る感ず・予習用読方帖・大正十二年一月十八日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 前の「吹雪の朝」の項を参照のこと。

〔付記〕 前の「吹雪の朝」の項を参照のこと。

私の學校生活・予習用読方帖・大正十二年一月十九日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 傍島正守は、「予習用読方帖」につきのように記している。

良く出来たが、学校で面白かったこと深く感心したことなども書く

とよい。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記され

ている。

## 十九日綴方課題

私の学校生活

牛・予習用読方帖・大正十二年一月二十日(?)記

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕傍島正守は、「予習用読方帖」につきのように記している。

牛の文は良いが、あまり茶化し過ぎた。

〔付記〕「予習用読方帖」には、他の綴り方のように、傍島正守の日や題名の指定がない。津島修治自ら「綴方『牛』」と題名を記したあと、文章を記している。

私の家庭・予習用読方帖・大正十二年一月二十一日記

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二十一日、私の家庭

雪合戦・予習用読方帖・大正十二年一月二十二日記

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕末尾に「終り」とある。「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二十二日、雪合戦か氷<sup>こ</sup>送り

胃の失敗・予習用読方帖・大正十二年一月二十三日記

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二十三日、人

津島修治は、「囚は作れません」と書き、そのあとに続けて、「胃の失敗」の綴り方を記している。

別れた友に送る・予習用読方帖・大正十二年一月二十五日記

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

綴方

二十五日、別れの友を送る。

以上

入學試験に合格せるを報ずる手紙・予習用読方帖・大正十二年一月二十七日(二十九日の間記)

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、題名だけが記され、続けて津島修治の綴り方が記されている。

病氣見舞の手紙・予習用読方帖・大正十二年一月二十八日(三十日の間

記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

近況を報ずる手紙・予習用読方帖・大正十二年二月二日（？）記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

綴り方

A 近況を報ずる手紙

B 希望

希望・予習用読方帖・大正十二年二月二日（？）記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」の傍島正守の指示については、前の「近況を報ずる手紙」の項の〔付記〕を参照のこと。

吹雪の朝・予習用読方帖・大正十二年二月三日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

綴り方

二月三日

1、吹雪の朝

2、僕の家

以上

僕の家・予習用読方帖・大正十二年二月三日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕傍島正守は、「予習用読方帖」につぎのように記している。

〔評〕家の近所はよく解つて居るが、肝心の家はどうな家であるか、わかりません。何屋根で、どの位大きくて、境内はどうか、勝手はどうか、何もわかりませんよ。

〔付記〕「予習用読方帖」の傍島正守の指示については、前の「吹雪」の項の〔付記〕を参照のこと。

僕の幼時・予習用読方帖・大正十二年二月四日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕傍島正守は、「予習用読方帖」につぎのように記している。よく書いた。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二月四日

僕の幼時

僕ノ友達・予習用読方帖・大正十二年二月五日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）

に、全文収載された。

〔同時代評〕 傍島正守は、「予習用読方帖」につぎのように記している。  
之もよく出来たが、人間でお友達はありませんか。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二月五日

僕の友達

僕ノ町・予習用読方帖・大正十二年二月六日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二月六日 僕の町

僕の學校・予習用読方帖・大正十二年二月七日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕「予習用読方帖」には、傍島正守によって、つぎのように記されている。

二月七日 僕の學校

編輯後記・蜷氣楼・十月号、創刊号・大正十四年十一月六日発行・12

頁・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は、「大正十四年十一月五日印刷納本」（絶対非売品）編輯兼発行人／青森市寺町一四（豊田方）／津島修治「印刷所／青森市寺町七二／青森印刷株式会社」発行所／青森市寺町一四（豊田方）／蜷氣楼。

編輯後記・蜷氣楼・十一月合併号・大正十四年十二月一日発行・23～24  
頁・署名「（修治）」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は「大正十四年十一月廿八日印刷納本」。

新文藝日記・大正十五年一月一日～一月三十日記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕『大正十五年新文芸日記』（新潮社、大正十四年十一月一日発行）に記載されたもの。「一月一日（金曜）」「一月二日（土曜）」「一月三日（日曜）」「一月四日（月曜）」「一月五日（火曜）」「一月六日（水曜）」「一月七日（木曜）」「一月八日（金曜）」「一月九日（土曜）」「一月十日（日曜）」「一月十一日（月曜）」「一月十二日（火曜）」「一月十三日（水曜）」「一月十四日（木曜）」「小品文（縣賞小品文用紙）」「一月十五日（金曜）」「一月十六日（土曜）」「一月十七日（日曜）」「一月十八日（月曜）」「一月十九日（火曜）」「一月二十日（水曜）」「一月二十一日（木曜）」「一月二十二日（金曜）」「一月二十三日（土曜）」「一月二十四日（日曜）」「一月二十五日（月曜）」「一月二十六日（火曜）」「一月二十七日（水曜）」「一月二十八日（木曜）」「一月二十九日（金曜）」

「一月三十日（土曜）」の各欄に、それぞれの標題にふさわしい記述がある。このうち、「小品文」は「記念サツエイ」と題されている。これは、「一月三十一日締切」の「懸賞小品文」であったが、投稿されなかったようだ。また、「懸賞短歌用紙」には、何も記されていない。なお、他に、「一月の感想」(二頁)「十二月二十四日（金曜）」「十二月二十六日（日曜）」「十二月二十八日（火曜）」「十二月二十九日（水曜）」「十二月三十日（木曜）」「十二月三十一日（金曜）」「十二月の感想」「知友一覽」(三頁)「購書記録」(三頁)の各欄にも、雑記、覚書的な記述が見られるが、これらは全集に収載されていない。

巻頭言・蜚氣楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・1頁・署名「首氏」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は「大正十五年一月二十日印刷納本」

合評記・蜚氣楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・26頁・署名「修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

編輯後記・蜚氣楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・31頁・署名「(修治)」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

巻頭言・蜚氣楼・二月号・大正十五年二月八日発行・1頁・署名「首

氏」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は「大正十五年二月六日印刷納本」

編輯後記・蜚氣楼・二月号・大正十五年二月八日発行・25頁・署名「(修治)」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

巻頭言・蜚氣楼・四月号・大正十五年四月二十三日発行・1頁・署名「衆二」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は「大正十五年四月廿一日印刷納本」「印刷所／青森市寺町七四／青森印刷株式会社」。

合評記・蜚氣楼・四月号・大正十五年四月二十三日発行・22頁・署名「修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

編輯後記・蜚氣楼・四月号・大正十五年四月二十三日発行・28頁・署名「(衆二)」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

編輯後記・蜚氣楼・五月号・大正十五年五月二十一日発行・23頁・署名

「衆一」]

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は「大正十五年五月二十日印刷納本」。

蜷氣楼同人諸價値表・蜷氣楼・六月号・大正十五年六月五日発行・21頁

・無署名

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）所載の相馬正一「解題」に、表全体が紹介された。

〔付記〕 初出誌は「大正十五年六月三日印刷納本」。

編輯後記・蜷氣楼・六月号・大正十五年六月五日発行・23～24頁・署名

〔修治〕

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

因果帳・蜷氣楼・七月号・大正十五年（月日不明）発行・19頁・無署名

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）

所載の相馬正一「解題」に、表全体が紹介された。

編輯後記・蜷氣楼・七月号・大正十五年（月日不明）発行・20頁・署名

〔修治〕

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

青んぼ街・青んぼ・創刊号・大正十五年九月一日発行・24頁・署名

〔衆〕〔辻島〕〔衆一〕

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）

に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌では、「大正十五年八月二十四日印刷」「編輯兼発行人／青森県金木町本町／津島圭治」「印刷所／青森県金木町寺町／金木印刷所」。

雑誌・蜷氣楼・九月号・大正十五年九月二十五日発行・7～12頁・「随筆」欄・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 文末に付記。初出誌は「大正十五年九月廿三日印刷」。

合評記・蜷氣楼・九月号・大正十五年九月二十五日発行・22～26頁・署名

名「修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

編輯後記・蜷氣楼・九月号・大正十五年九月二十五日発行・26～27頁・署名

署名「修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

青んぼ街・青んぼ・第一巻第二号・大正十五年十月五日発行・24頁・署名「辻島」『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は「大正十五年九月二十六日印刷」「編輯兼発行人／青森県金木町本町／津島圭治」「印刷所／青森県金木町寺町／金木印刷所」「発行所／青森県金木町本町／青んぼ社」。



編輯後記・蜃気楼・十月号、壹週年記念号・大正十五年十一月八日発行・37頁・署名『修治』

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は、「大正十五年十一月六日印刷」。

編輯後記・蜃気楼・十一月、十二月合併号・大正十五年十二月二十日発行・30頁・署名「〔修治〕」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は、「大正十五年十二月十八日印刷」。

編輯後記・蜃気楼・一月号・昭和二年二月十五日発行・38頁・署名「〔修治〕」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌は「昭和二年二月十二日印刷」。

KIMONO・昭和二年記・署名「L. I. I. Shuge Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 英人教師 G. P. Bruhl は、作文の末尾につきぎのように記している。

Good

The Real Cause of War・昭和二年記・署名「L. I. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）

に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhl は、作文末尾につきぎのように記している。

Most Excellent.

Is this essay absolutely original? If it is, then it shows great promise, and not only this, but shows some brain behind it.

What do you mean by "a great humour"? Do you mean that you are amused, or do you mean that you feel "strangely moved"?

What is Real Happiness?・昭和二年記・署名「L. I. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhl は、作文末尾につきぎのように記している。

Excellent

Are We of To-day Really Civilised?・昭和二年記・署名「L. I. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された

〔同時代評〕 G. P. Bruhl は、作文末尾につきぎのように記している。

Very good-but hardly a treatment of the subject!

Should the Sake of Alcoholic Beverages be Restricted?・昭和二年記

・署名「L. I. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhl は、作文末尾につきぎのように記している。

Very Good

The Ainu・昭和二年記・署名「L. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhlは、作文末尾につきぎのように記している。

Very Good

My Holiday・昭和二年記・署名「The Hiroasaki High School L. I. I.

Shuge Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhlは、作文末尾につきぎのように記している。

Good Note corrections

A Walk in the Hills in Autumn・昭和二年記・署名「L. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhlは、作文末尾につきぎのように記している。

Very Good (too short)

A very brief history of his first half life. (Not biography, because he has still his future.)・昭和二年記・署名「L. I. I. Shuge Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhlは、作文末尾につきぎのように記している。

Very good, but why do you write about yourself as "he"? The subject concerns you alone, you should have written in 1<sup>st</sup> person singular-"I".

Bushi Do・昭和二年記・署名「L. I. S. Tsushima」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 G. P. Bruhlは、作文末尾につきぎのように記している。

Very good

Togo was not a soldier.

細胞分裂・細胞文芸・創刊号、第一巻第一号・昭和三年五月一日発行・

7〜8頁・無署名

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）所載の相馬正一「解題」に、全文引用された。

〔付記〕 初出誌は、「昭和三年四月二十七日印刷納本」編輯兼発行人津島修治／（弘前市富田新町五七藤田方）、「発行所細胞文芸社／（弘前市富田新町五七藤田方）」「印刷人千葉平吉（青森市米町五七）」「印刷所株式会社啓明社／（青森市米町五八・五九）」

編輯後記・細胞文芸・創刊号、第一巻第一号・昭和三年五月一日発行・

114頁・署名「（辻島）」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

編集後記・細胞文芸・七月号、第一巻第三号・昭和三年七月一日発行・

78頁・署名「（辻島）」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は「昭和三年六月三十日印刷納本」「編輯兼発行人津島修治／（弘前市富田新町五七藤田方）」「発行所細胞文芸社／（弘前市富田新町五七藤田方）」。

編輯後記・細胞文芸・九月創作号、第一巻第四号・昭和三年九月五日発行・98頁・署名「（辻嶋）」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は「昭和三年八月三十日印刷納本」「編輯兼発行人津島修治（弘前市富田新町五七藤田方）」「発行所細胞文芸社（弘前市富田新町五七藤田方）」。

先づ圖書室を見舞ふ・弘高新聞・第五号・昭和四年二月十九日発行・第2面・署名「（銀吉）」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は、「編輯、発行兼印刷人／弘前高等学校／上田重彦」「発行所／弘前高等学校校友会／新聞雑誌部」「印刷所／青森市寺町七十四番地／青森印刷株式会社」。

虎徹宵話・狼騎兵・第六号、創作特輯号・昭和四年七月十五日発行、昭和四年八月三日発売・9／15頁・署名「小菅銀吉」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は「編輯兼発行人／青森市浦田野脇三六ノ一／藤田金一」

「発行所／青森市浦田野脇三六ノ一／狼騎兵」「印刷人／青森市新町九五ノ米倉元吉」「印刷所東北印刷合資会社」「三〇銭」で、同誌には、阿部合成「南京嵐と士官」、小菅銀吉「虎徹宵話」、淡谷悠蔵「林檎畑」、水沼輝夫「聖人（一幕戯曲）」が掲げられている。

編輯後記・校友会雑誌・第十五号・昭和四年十二月十五日発行・195頁・署名「（小菅）」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和五十二年十一月三十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌は、「昭和四年十二月十日印刷」「編輯兼発行人／弘前高等学校／上田重彦」「印刷者／青森市米町五八・五九／駒谷光雄」「印刷所／青森市米町五八・五九／株式会社啓明社」／「（非売品）」「発行所弘前高等学校校友会新聞雑誌部」。

地主一代―第一回―・座標・創刊号・昭和五年一月一日発行・30／39頁

・署名「大藤熊太」

〔同時代評〕竹内俊吉「前号の小説を読む」（「座標」第一巻第二号、昭和五年二月一日発行）には、つぎのように記されている。

大川祥八郎君、加藤祥文君、大藤熊太君の三君は（私の知る範囲では）座標創刊号に発表した小説をもつて、新しい方向に（プロレタリア解放の）転換したものと見ることが出来る。といふのは、大川、加藤の両君は、従来発表して来た小説に拠れば、新感覚派（さういふのが今も中央に残つてゐる）？殊に加藤君は理論的にも形式主義の立場にあつた。大藤君は小菅銀吉の名によつて発表した「虎徹宵話」に於

て、若干従来の方向を換へたやうにも見えたが、まだまだ開き直つては居ないで、たうくわいの程度であつたのが、今度の「地主一代」は、とに角、正面へ向き直つたところが注目される。(略) / 「地主一代」大藤熊太 / 実に小説がうまく描けてゐる。スキがない。運びが手に入つてゐる。けれどもプロレタリア文学のスタイルとしては、どうであらう。早い話がこれは長篇で、いづれ小作爭議ナド出て来るのだが、このスタイルで、爭議が爭議らしく相当アツピールするやうに描かれるだらうかといふことが案ぜられる。長篇の序曲であるから、今はこれ以上、多くを言へぬ。

〔付記〕初出誌の(竹内)の「編輯後記」には、つぎのような記述が見られる。

小説「地主一代」は一年位は連載される筈で、作者大藤熊太はペンネームで、曾て弘前から個人編輯の文芸雑誌を出した人である。この作品は作者にとつては転換後最初作品で大いに力を入れてゐる。

初出誌は、「昭和四年十二月廿五日印刷」「編輯発行兼印刷人／東津輕郡造道村字松森／船水公明」「印刷所／青森市新町九六／東北印刷合資会社」「発行所／青森市浦町橋本二七〇／座標社」「発売所／青森市新町／成田善三郎書店」で、同誌「創作四篇」欄には、大川祥八郎「後に廻つた題名」、加藤祥文「指の記録」、淡谷悠蔵「十年」、大藤熊太「長篇地主一代」が掲げられている。

長篇地主一代―第二回―・座標・三月号、第一卷第三号・昭和五年三月一日発行・60頁・署名「大藤熊太」

〔付記〕「座標」二月号「編輯後記」に(俊吉)は、つぎのように記して

いる。

本号の創作欄に載せる筈であつた「地主一代」の続きは作者病氣のため休載の余儀なきに至つた。

また、「座標」三月号「編輯後記」に(俊吉)は、つぎのように記している。

大藤熊太氏は爾後隔月に「地主一代」をつづけることになつた。

初出誌は、「昭和五年二月二十五日印刷」で、「創作」欄には、大藤熊太「長篇地主一代」、安渡浦人「裸で来る者」、竹内俊吉「あるテムポ」が掲げられている。

長篇地主一代―第三回―・座標・五月号、第一卷第五号・昭和五年五月一日発行・51頁・署名「大藤熊太」

〔同時代評〕竹内俊吉「座標」(座標)第一卷第九号、昭和五年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

座標にもつと、農民を扱つた創作を見たいものだ。大藤熊太君の『地主一代』は農民を扱つたものだつたが、惜しいことに中絶した。

長篇學生群―第一回―・座標・七月号、第一卷第七号、昭和五年七月一日発行・62頁・署名「大藤熊太」

〔付記〕初出誌「編輯後記」に竹内俊吉は、つぎのように記している。

大藤熊太君の『地主一代』は作者が止むを得ざる外在的理由で、続稿の掲載を見合せねばならぬことになつた。そして、作者は新に、長篇『學生群』の筆を執つた。これは作者直接の経験をもつてした力作で半年以上つゞく予定である。

初出誌は、「昭和五年六月二十五日印刷」「編輯発行兼印刷人／東津

軽郡浜館村字松森／船水公明」『印刷所／青森市米町五十八番地／啓明社印刷所』「発行所／青森市浦町橋本二七〇／座標社」で、同誌「創作」欄には、大藤熊太「学生群」、久野紫郎「坑夫」が掲げられている。

長篇學生群―第二回―・座標・八月号、第一卷第八号・昭和五年八月一日発行・72頁・署名「大藤熊太」

〔同時代評〕青木了介「八月号創作評／宇宙的な潔白さについて」〔座標〕第一卷第九号、昭和五年九月一日発行）には、つぎのように記されている。

★その一―大藤熊太氏の（学生群）に就て／此れは（文学）であり、（芸術）であるかも知れない。然し決して（プロレタリア小説）でもなく、（プロレタリア文学運動）でもない。その名の語る如く、此れは（学生群）の生活である。若くして清純なイテリゲンツィアの熱情である。／（若くして清純な人々）のすべてが、さうである様に、彼も亦すべて不合理なるものに対して、少なからざるいきどほりを感じて居る（らしい）。／と云ふのは、あの小説を読めば分る様に、彼自身がその清純な人々の一人としての感情を以て、書きつづつて居るからである。／おそろしく感情的である。激情的である。若者のすべてがさうである様に作者もまた、熱血をその紙背にはとばしらして居る。だが―惜しいことには、それだけでしかない。いきどほり、不満、反逆―それ等のものが、ただ単に、（学生群）の―言葉を換へて云へば（インテリ群）の―それではない。／（此處でこそ我等の權利を主張することが出来るのだ）―と作者は叫んで居る。何處で？―単に（学生群）の中に於てのみか？―だとすれば、私の潔白さは、遺憾ながら此

のまゝ筆を止めねばならぬ。何故ならば（此處でこそ我等の問題を議論することが出来る）―と作者が希望を持ち、頼り、その中にのみ自らの力を感じ見出して居る階級が、ただ単に（インテリ学生群）のそれではないとしたならば、おそろしく彼が感じて居る一切の不満不平を氷解する事が出来ないであらうから……（学生群）によつて代表された、最大多数の人類―即ち宇宙的な範圍―の中でと作者は答へるかも知れない。それならば、此の小説はあまりに弱すぎると云はねばならぬ。そのためにはあまりにも（文学）であり（芸術）でありすぎる。

そして此れが、単に作者の、自伝的、または単に記録の意味に於ける（小説的事実の回想）止まるとしたならば、私は（ありしものの影）の永く地上に止まることを欲しないであらう。／（学生群）が単に（学生群）であることを望まない。（学生群）が（広く且つ偉大なる）階級との密接な連関のもとに行動することを希望する。―そして幸ひにも長篇であることに、私はいささかの期待を持つて、次の機会を待ちたい。／『諸君……』／彼は悲痛な声をしばつて叫んだ……（傍点筆者）／私は、第二回（学生群）の中に（悲痛な）若者たちの、顔を赤らめて叫ぶ、若々しい叫喚の外に何ものをも聞くことが出来ない。何かしら（人道主義的）な行動にたづさわつて居る若者たちの（例へば青年団員たちがメガホンをもつて左側通行をどなつて居る時の様な）ヒソウな面持ちをししか見ることが出来ない。／プロレタリアートの行動には、何かしら偉大な、此の（学生街の人々）には見られない宇宙的な圧力を感じることが出来るのであるが……

〔付記〕初出誌は、「昭和五年七月二十五日印刷」で、同誌「創作」欄に

は、大藤熊太「学生群」、大川祥八郎「街の特産物」が掲げられている。

長篇學生群―第三回―座標・九月号、昭和五年九月一日発行・62〜78

頁・署名「大藤熊太」

〔同時代評〕淡谷悠蔵「九月号創作批評」（座標）第一巻第十号、昭和五年十月一日発行）には、つぎのように記されている。

長篇 学生群（第三回） 大藤熊太／私はこの小説の第一回を読んだ時、同じ作者の『地主一代』に比して、著しく真面目な意気込のあるのを快く感じた。学生の若々しい昂奮に対しても、作者は真向から打ち込んで書いて居る。ストライキの裏と表の観察、さまざまの個性の取扱方にも『地主一代』に於いて感じた、皮肉なうす笑ひがなかった。勿論、学校当局の表面ばかりとりすまして、実は慘澹と汚い内幕の曝露などには、ちよい／＼この作者の諷刺の影がさ／＼ぬでもなく、また諷刺にはもつて来いの材料でもある。しかしこの作では作者の殊更に真向から決るやうにつとめて居るあとが歴然とわかる。私はこの意図を正しいものとする。学校ストライキを通じて、社会運動にある批判を加へやうとする気持も解る。よしその批判には九月号の批評で青木了介君が指摘して居るやうに、ある誤謬が犯されて居るとしても、ストライキそのものを頭からふ／＼と嘲笑してか／＼つて居ないといふ一点で、大藤君のこの作に見える転向を支持するものである。／『学生群』には、さまざまの個性が描かれて居る。その個性の一つ一つのストライキに対する関係を描くことで、この作は構成されて居る。さてその個性の一つとして第三回にあらはれる青井である。／彼は裕福な地主の息子、文学の志望者、彼の下宿は、光る絹布の夜具と、

電気スタンドの真紅のシェードのある『蛟龍の洞窟』である。そして彼も亦、平生から社会主義的学生運動への参加者であり当然またその物質的な援助者である。／私はこの『学生群』を読んで、作者は、作中の人物の持つて居るイデオロギーを、その人物の實際生活の正直な反映として描いて居ることに気づく。青井も亦、如何にイデオロギーを尖鋭にしても、その情感に於いて、その属する階級を裏切ることとは出来ない。潔癖な、そしてトロツキーズの誤謬を孕んで居る文学論から『芸術運動を深く放棄し』『校友会雑誌の委員も辞し』『劇研究会幹事の栄職も捨て』て『プロバガンダ、カルチャー・シヨンのなんぞの余り華やかでない仕事に関係し、貧窮して居る進歩的な生徒へは喜んで財政的支持を申し出て』も、彼はその生活、自分の生活一つの革命が出来ない。『お梅や、冷蔵庫にメロンがあるから。なんぞと、だみ声を張り上げて我が身は籐の長椅子にござろしなから、レコードをかけ、映画雑誌でもひろげて居やうと言ふ呆れ果てた有様』を脱することが出来ない。／青井がこの矛盾に悩むことは無意味ではない。口先丈の筆先丈の勇敢さ、『革命的な書籍を引つ張り出』して、『表情さへ深刻にして』読むこと丈で、天晴闘士を気取ることでは満足し切れないところに、青井のよさがあるのだ。ところが、そのよさを青井は生かし切れない。／自分の方向を定めて『歩一歩確実な努力』を続けて行くことが出来ない。放蕩と絶望と悔恨とから、最後は泣き乍ら死を恋ふ／青井のこの絶望感は、学生群の一人としての青井丈のものではない。／最初ある期待を持つて、読み初めたこの『学生群』が（第三回）に至つて著しく全体的に青井の持つ絶望感と、自嘲の影を濃くして来

たことに、再び『地主一代』の陥った穴へはまり込んで了ふ危険を感じさせる。木島と鶴田といふ二人のルンペンの学校工場論なども、甚だ漫談的な自嘲と、弛緩した意識を遺憾なくさらけ出して居る。青井

の友人で『盟休生』六百名を代表して『ある秘密の大役を果す為に』上京する小早川までが、青井の愚痴にひきずられて『判る、青井！だが死ぬな。死ぬな。理論もクソもねえ。青井が死ぬれば僕は淋しいからだ。青井、泣く事はないぞ。僕は青井を好きなのだ……』と人情至情主義の『大粒の涙をぼろ／＼零して、めそ／＼泣き出』すに至つてはスト

ライキは第一日から、既に怪しい雲行である。／『学生群』は最初の爽かな転向の意気にもかゝらず、再び遺伝と墮性と諦めと自嘲と頹廢の泥に足をとられて了ふのではないか、あらゆる過去と境遇と遺伝と生活とと一緒に熾烈に燃え立たすのが、新しいイデオロギーではないのか、若し『学生群』の作者の意図が、これ等学生群を新しい光の中に見出すことではなくて、如何なるイデオロギーの熱に焼いても尚つきまとふ過去の世界の幽霊を描くにあつたとすれば、私は遺憾乍ら、さきの私の支持を取消さざる得ない。／でなければ、学生群（第四回）はもう一度転向を遂げなければならない。

〔付記〕初出誌には、前回につづく（C）敗慘者（D）女（E）ルンペン（ストライキ第二日）の三項を、掲載。九月号所載「学生群」の末尾には、「（五、『彼等』の章終り）」「一九三〇、八、一五」とあり、さらに「六、スパイ／七、実行委員会／八、第一歩／以上次号掲載」とある。初出誌は、「昭和五年八月二十五日印刷」で、同誌「創作」欄には、大藤熊太「学生群（長篇）」、平沢鉄男「海岸自由労働者」、川崎

文男「爆発する蛙罐」が掲げられている。

長篇学生群―第四回―座標・十一月号、第一卷第十一号・昭和五年十

一月一日発行・21／30頁・署名「大藤熊太」

〔同時代評〕大川祥八郎「十一月号創作評言」（座標）第一卷第十二号、昭和五年十二月一日発行）には、つぎのように記されている。

ロ、学生群 大藤熊太／これは『走り書的学生群』とても題名を換へるとびつたりするであろう。作品は長篇にふさはしからざる短距離のスピードとテンポを持つてゐる。読者はそのテンポにつれてぐんぐん眼を移動させる悪漢追跡のスチールだ。そしていつまでも悪漢追跡を見てると、つひにはファンは眼を疲労させて眠くなる。しかし僕は忍耐強いから終りまで読みこらへた。あゝ、眼が痛い。／―写真はどうだった／―写真かい。写真はね―写真はね、どんどん駈けたんだい／―なにが駈けたんだい／―なんだかどどん駈けてゐたよ。するとね、第四巻の終りになる頃、梅の花が咲いたよ。貫一みたいな学生が『ほのぼのと浮いて見えた』よ。そしてそれが『変にうつとりした懐しい風景だった』よ。／―それから／―あとは次だつてよ

〔付記〕初出誌は、「昭和五年十月二十五印刷」で、同誌「創作」欄には、瀧甲平「村の素描」、大藤熊太「学生群」、加藤祥文「血蜘蛛」が掲げられている。なお、「座標」十二月号（第一卷第十二号、昭和五年十二月一日発行）の「編輯後記」に、竹内俊吉はつぎのように記している。

大藤熊太君の『学生群』は今月号で完成の筈のところ、十八日まで待つたが、原稿が到着しなかつたので、残念ながら、次号を飾ることにした。

〔追記〕本稿は、「太宰治著述一覽稿（Ⅰ）——自大正十二年至昭和七年——」

（「神戸女学院大学論集」第十九卷第三号・昭和四十八年三月十五日発行）の部分を、「補訂」したものである。もとの稿とあわせてご覧いただきたい。また、この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表する。小山内時雄氏、小野正文氏、瀬尾政記氏、相馬正一氏、津島美知子氏、藤田金一氏、三上斎太郎氏、森下志郎氏、青森県立図書館、彦根市立図書館、弘前大学附属図書館、筑摩書房。なお、本稿は、神戸女学院大学研究所の研究助成による業績の一端である。

原稿受理 一九八七年十一月三十日